

本邦における知的ギフトド研究に関する現状と課題

Current Status and Issues of Research for Intellectually Gifted in Japan

荻布 優子*
Yuko OGINO*

要旨 (Abstract)

文部科学省により特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議が設置され(2021)、本邦においても知的ギフトドへの学校教育場面での支援体制を確立しようという流れがある。そこで本稿ではスコピオンレビューの手法を用い、過去20年の本邦におけるギフトドに関する研究状況を概観し、知的ギフトドへの対応について今後の課題を検討することを目的とした。その結果、知的ギフトドに関する報告はこの20年間で徐々に増加しているものの、24報と十分とはいえない状況であった。また海外のギフトド教育制度に関する報告が最も多く、本邦における事例ベースでの報告は10年ほど前から数件のみであった。よって根拠に基づきより効率的で効果的な介入方針へと整理していくためには、多面的なアセスメントと定量的な効果検証がなされた事例ベースでの知見の蓄積が必須であると考えられた。また知的ギフトドの情緒面・行動面・生活適応上の困難さへの対応と、好奇心を尊重し特異な能力を伸ばしていくことがないがしろにされやすいという問題の双方を包括的に解決していくためには、「個に応じた指導」を学習者の視点から整理した概念である「個別最適な学び」をすべての児童生徒で実現しようとすることに包含されるのではないかと考えられた。

キーワード：知的ギフトド 発達障害 インクルーシブ教育 スコピオンレビュー

I. 研究背景と目的

2021年、文部科学省により特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議が設置され、本邦においても知的ギフトドへの学校教育場面での支援に本格的に着手されようとしている。知的ギフトドとは優れた潜在的能力を持ちながら学習の困難を併せ持つ子どものことを指し(日高ら, 2014)、「優れた潜在的能力」という実に抽象的で漠然とした概念を扱うにあたり、才能教育を実施する国において標準化された知能検査を判断に用いる場合には指標得点120-130が目安とされている(松本ら, 2017)。かねてより本邦での知的ギフトドに対する支援は、一部の医療関係者や専門的な支援者の間で注目され、臨時的にその必要性が訴えられてきている。これまで特異な才能にのみ注目が集まり生活上の困難さに対する介入が得られにくい、あるいは生活上の困難さにばかり注目されて特異な才能に対する援助はないがしろにされてきたと推測されるギフトドに対する教育関係者の注目度は、有識者会議の設置に伴い今後も上がっていくものと推測される。

しかし、本邦のギフトド支援を牽引してきたともいえる「異才発掘プロジェクト ROCKET (Room Of Children

*奈良学園大学人間教育学部

**本稿に関して開示すべき利益相反関連事項はない。

with Kokorozashi and Extraordinary Talents)」は同じく2021年に看板を下ろし、別プロジェクトへと移行した。ROCKETは突出した才能がありながら既存の教育環境との間に不適應を起し、不登校等の傾向にある小中学生を対象として2014年に始動したプロジェクトであり、継続的な学習支援と生活のサポートを行うものであった。

この相反する出来事は本邦におけるギフテッド支援の草創期に始動したプロジェクトであったこと、知的ギフテッドに関連するキーワードとしてギフテッドや2E、才能教育、早熟、など様々な用語が用いられることもあり、対象となる児童生徒の状態像や支援の方向性が一貫されにくいといった状況があったものと推測される。またギフテッドへの対応は特異な才能を伸長する教育という方針と、特別支援教育の拡充といった方針、あるいはインクルーシブ教育の拡充など、正反対にも思われる方針が謳われており、議論が混迷しているともいえる。

よって今回スコープオンレビューの手法をもちいて、臨床的な実践例や取り組みはいったん脇に置き、知的ギフテッドに対する研究の側面からどのような検討および議論がなされてきているのか現状を明らかにすることを試みた。本稿では、本邦におけるギフテッドに関する研究状況を概観し、知的ギフテッドへの対応について今後の課題を検討することを目的とする。

II. 方法

1. 対象とした文献

本研究では、本邦におけるギフテッドに関する報告を「Google scalar」にて検索した（検索日:2023年6月25日）。本研究では全文データの入手にやすさ、網羅的に学術情報の検索が可能、といった点からGoogle scalarを検索に用いることにした。検索キーワードは「ギフテッド」としたところ、約130件が該当した。そのうち①タイトル、②要旨、③キーワード、のいずれかに「ギフテッド (GT)」を含む文献で、インターネット上で全文がダウンロード可能なものを分析対象とした。なお学会報告の抄録や、書評は対象外とした。

2. 分析方法

過去20年の報告を5年ごとに集計し、その数の推移をみる。合わせて①海外のギフテッド教育制度に関する報告、②本邦のギフテッド教育制度に関する報告、③ギフテッド当事者を対象とした事例報告、④ギフテッドのアセスメントや特徴に関する調査研究、⑤ギフテッドに関するレビュー論文、の5つのカテゴリーに分類することとした。

III. 結果と考察

1. 報告数の推移

過去20年のギフテッドに関する報告を5年ごとに集計した結果を図1に示す。2003～2007年0報、2008～2012年2報、2013～2017年9報、2018～2022年13報であり、年々増加していた。またその内訳を表1に示す。海外のギフテッド教育制度に関する報告が8報と最も多く、次いで本邦のギフテッドに関するレビュー論文が6報と次いで多かった。本邦のギフテッド教育制度に関する報告や、アセスメントや特徴に関する調査研究は少ない傾向にあった。次項から各年代の特徴について詳しく考察する。

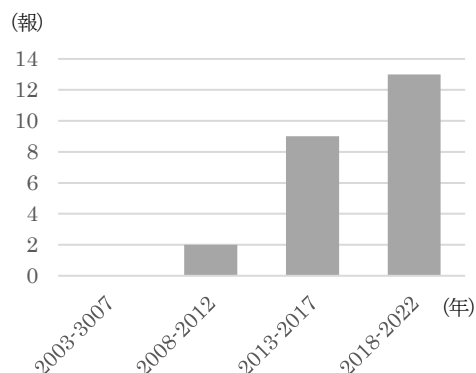


図1 過去20年のギフトに関する報告の推移

表1 過去20年のギフト関連報告の内訳

	①海外の ギフト 教育制度に 関する報告	②本邦の ギフト 教育制度に 関する報告	③ギフト当 事者を 対象とした 事例報告	④ギフトの アセスメントや 特徴に関する調 査研究	⑤ギフトに 関する レビュー論文	合計
2003-2007年	0	0	0	0	0	0
2008-2012年	2	0	0	0	0	2
2013-2017年	4	2	2	0	1	9
2018-2022年	2	0	3	3	5	13
合計	8	2	5	3	6	24

2. 2003～2007年の特徴

2003～2007年に発行されたギフトに関する報告は0報であった。2002年から一部の高等学校でスーパーサイエンスハイスクール（SSH）が施行されたり、さらに数年遡った2001年には大学への飛び入学が制度化されており（文部科学省，2019）、文部科学省主導の特定の分野（特に理数系）における特異な才能を有する生徒に対する才能教育の色合いが濃い期間であったといえる。またこの期間は特殊教育から特別支援教育への移行以前であり、個別の教育的ニーズへの対応対象は視覚障害・聴覚障害・知的障害・肢体不自由・病弱が中心であり、心身に障害を有する児童生徒に限定されていた。また個別の教育的ニーズを有する児童生徒への教育の場も、養護学校や特殊学級が主であった。合わせて、今日でこそ支援対象として浸透してきた知的発達に遅れのない発達障害に関しても「今後の特別支援教育の在り方について」（2003，文部科学省）において注意欠陥／多動性障害（ADHD）や高機能自閉症の定義が示され、支援対象を拡充する流れとなり始めた時期であることを鑑みると、特別支援教育の文脈でも本邦において知的ギフトの存在にまで注目が及びにくくあったことは想像に難くない。

3. 2008～2012年の特徴

2008～2012年に発行された知的ギフトに関する報告は2報であった。それらの概要を表2に示す。この2つの報告はいずれも海外のギフト教育制度に関する内容であり、今後の展望として中村ら（2010）は特別支援教育の視点から、是永（2012）はインクルーシブ教育の視点から、本邦におけるギフト教育制度の確立の必要性を提

言している。この期間は、2006年に学校教育法等が一部改正となり特殊教育から特別支援教育へと大きな転換期を迎えていた。もちろん転換期を迎えたといえど障害（＝医学的診断）があることが前提であるという風潮は変わらず、特殊教育よりも対象を拡大したことに特徴があり、疾患概念ではないギフテッドが特別支援教育の対象に該当するとも言い難い。ただ才能教育にとどまらず、発達障害特性を併せ有する2Eや生活上生じている困り感への支援の必要性を認識する専門家がわずかではあるが存在し、ギフテッド教育先進国を参考としながら特別支援教育の文脈での報告が続いたと推測される。また2009年には杉山らによって「ギフテッド-天才の育て方」という一般向け書籍が出版されている。これは本邦において1冊全てをギフテッドに言及した初めての書籍であると思われる。書名に「天才」というキーワードが含みこまれているもの実際には才能教育よりも認知発達の偏りや2Eに着目した内容となっており、特別支援教育の視点からまとめられている。このように特別支援教育の視点からのギフテッド対応を訴える報告・書籍がいくつか発行されるのみであり、ギフテッドに関する一般の認知度はまだまだ低く、才能教育の流れが主流であったといえよう。

表2 2008～2012年のギフテッド関連報告の概要

分類	著者	発行年	概要
①海外のギフテッド教育制度に関する報告	中村ら	2010	アメリカ合衆国におけるGT教育の実際に関する研究を概観し、GT児の定義や心理的特徴、支援方針、GT教育の制度（通常教育の拡大として）、問題点と課題について紹介。そのうえで本国におけるGT教育の可能性を提言。
	是永	2012	北欧諸国のなかでもノルウェー・デンマークの通常学校における通常学校でのインクルーシブな教育実践について概観し、特にデンマークでの「ギフテッドプログラム」について紹介。

4. 2013～2017年の特徴

2013～2017年に発行された知的ギフテッドに関する報告は9報であった。それらの概要を表3に示す。変わらず海外のギフテッド教育制度に関する報告が約半数を占めているが、この期間に初めてギフテッド当事者を対象とした事例報告がいくつかなされている。

小泉（2014）はWISC-IVのプロフィールを中心に言語理解及び知覚推理の高さ、処理速度がもっとも低得点であることという特徴を示した。松本ら（2015）は小学生のギフテッド当事者に聞き取り調査を行い、特別な教育的ニーズについて具体的に把握し、こだわりや時間感覚が鋭敏であるが故のパニック、勝ち負けや1番へのこだわり、状況の高い理解力とこだわりの相乗効果による困難さ、などを見出した。両者に共通するのは、情緒面の問題や集団不応、読み書きの苦手さなどの「困難さ」が生じていたために特別支援教育の対象となりえたものの、高い能力や才能を伸長させるための支援は既存の学校教育システムの中では対応しきれない状況に言及していることである。また2014年には異才発掘プロジェクトROCKETが始動している。このプロジェクトは、科学技術や芸術、スポーツ界など様々な分野に特化し、対象児童生徒たちの興味や関心に合わせて自分自身の学びを加速させることに重点を置いていた才能教育であった。公教育ではカバーできない領域を担う枠組みとして期待は高かったものの、結果的に都心部在住者に限られ、能力による選抜がなされる等の制約も存在していた。突出した特異な能力を持つ児童生徒への支援体制が整備される流れができつつあるものの、特異な能力を伸ばす方向性と困難さへの対応が独立せざるを得ない状況

表3 2013～2017年のギフテッド関連報告の概要

分類	著者	発行年	概要
①海外のギフテッド教育制度に関する報告	松本ら	2013	アメリカ・イギリス・アジア諸国におけるギフテッド教育の動向、EU加盟国におけるギフテッド教育の場及びギフテッドに対する特別な教育規定、補償的措置について明らかにしている。対象範囲は徐々に広がり、アメリカでは全ての子どもの才能を伸ばすためのSEM教育、イギリスでは才能を持つ子どもの苦手な部分を「ニーズ」として捉える、アジア諸国では国家の人材育成、といった国ごとの傾向の違いを示した。
	松本ら a	2015	諸外国の文献を参考にギフテッドの持つ情緒社会面・行動面・感覚面の問題と対応策を検討した。日本の学校教育システムにおいてギフテッドが持つ教育的ニーズに対して何ができるのか具体的に検討していく必要性を提言。
	関内 a	2016	アメリカ合衆国のギフテッド対応型RTIモデルが従来の学習障害児支援システムとして普及しているRTIモデルと比較し、特徴と意義を検討した。
	関内 b	2016	アメリカ合衆国において普及しつつあるギフテッドにも適応可能なRTIモデルを取り上げ、才能教育カリキュラムの主な方針である「早修」と「拡充」がギフテッド対応型RTIモデルにどのように取り入れられるのか、その特徴と意義を検討した。
②本邦のギフテッド教育制度に関する報告	松本ら b	2015	明治期・大正期・昭和期における日本のギフテッド教育について明らかにした。
	林	2017	アメリカのギフテッド概念の概観し、日本におけるギフテッド研究の現状と課題を考察した。特別支援教育の枠組みの中で2Eを対象とした研究が中心となっており、障害や困り感の無いギフテッドが対象外となることから、ギフテッド全体を対象とした研究や教育が必要であることを示唆。
③ギフテッド当事者を対象とした事例報告	小泉	2014	知的ギフテッドとディスレクシアを併せ持つ事例を通じて、教育的支援の可能性について論じる。WISC-IVにおける高い知的発達水準（言語理解と知覚推理で「非常に高い」）である一方、学習の問題（漢字が覚えられない・計算が遅い・集中できない）と精神的な脆弱性（自分は駄目な人間なんだ）を併せ持つ事例に対し、WISC-IVを活用した自己理解の促進・知的好奇心を満足させる学習内容の設定、読み書きへの代替手段の活用を行った。
	松本ら c	2017	ギフテッド教育対象者と思われる日本の当事者（小学生）に対して聞き取りを行い、ギフテッドの持つ特別な教育的ニーズを具体的に検討した。予定へのこだわり・予定時間が過ぎるとパニック・勝ち負けや1番へのこだわり・集中や行動の切り替え・調子が悪いときの逸脱・見通し・一方的に話す、といったニーズを把握した。通常学級と特別支援学級の双方の良い点を活用し、個人の能力の伸長と集団適応の力の双方の課題設定を行うことが重要であると考察した。
⑤ギフテッドに関するレビュー論文	小泉	2016	知的ギフテッドのWISC-IVプロフィールの特徴、知的ギフテッド認知特性の同程度とそこから生じる困難さ、知的ギフテッドの教育的支援の在り方について論じた。

でもあった。海外のギフテッド教育制度に関する報告が最も多かったことから、本邦でのギフテッド教育の制度設計のための模索期でもあったと考えられる。

またこの期間に発行された小泉（2014）の報告にて、初めて“知的ギフテッド”という用語が登場する。このことで特定の理数系領域やスポーツ、芸術等の突出した才能を有する児童生徒だけではなく、知的発達水準にも着目することで対象概念を拡大されることを示したと考えられる。

表4 20018~2022年のギフテッド関連報告の概要

分類	著者	発行年	概要
①海外のギフテッド教育制度に関する報告	松村	2018	2E教育に関してアメリカの動向を踏まえながら、日本でも今後期待される実践について概説した。才能・2Eなどの用語整理、超活動性と発達障害特性の区別、包括的アセスメント、必要な支援プログラム、について紹介し、複数の学校や教室などギフテッドに特化した教育機関の実際をまとめている。
	是永ら	2021	デンマークで教員を対象にインクルーシブ教育に関する意識調査を行った。通常の学級にギフテッドは無条件で受け入れる割合が高く、ディスレクシアや言語障害については一定の条件を課した上で受け入れることが基本であった。また知的障害の子どもを通常学級に受け入れるという意見が一定の割合を占めた。情緒・行動障害は特定の条件なしで受け入れる割合は低く、日本の特別支援教育のみならずいじめ・不登校・反社会的行動等を含む情緒・行動障害の子どもインクルーシブ教育が課題であることが示された。
	糸井ら	2021	ASDの小学校中学年の児童1人を対象としたギフテッド教育の実践に筆者が参画し、分析した。週1回程度、通常学級とは別の場で中学・高校の理科の実験を中心とした活動保障としてのギフテッド教育が実践された。ユニバーサルデザインの観点として視覚化が取り入れられ、教材教具の工夫が行われた。特別な教育的ニーズに応じるという観点で特別支援教育の蓄積を活用しつつ、指導の具体化の必要性が示された。
③ギフテッド当事者を対象とした事例報告	本郷ら	2022	ある知的ギフテッド児の6~12歳までの横断的变化を追跡し、発達過程と学校適応に焦点を当て、知的ギフテッド児の発達特徴のアセスメントに基づく支援の在り方について検討した。高い知的発達水準であったが認知的アンバランスは認められなかった。情動調整や感覚過敏、忘れ物や物の管理の難しさがあったが、ASDやADHDといった発達障害のその他の特徴には該当しなかった。小学校3年以降、対象児の特徴が周囲に理解されず、いじめ・不登校につながった。知的ギフテッド児の特徴と抱える問題は、発達に伴って変化するため、各時期の発達アセスメントの結果に基づく短期的目標を設定し、支援を行うことの重要性を示した。
	河村ら	2022	不登校と学習の困難を主訴として支援を行う課程で知的ギフテッド及び2Eであることが判明した一事例を通じて、知的ギフテッドのワーキングメモリ特性を検討した。対象児は高い全般的知的発達水準にあり、ワーキングメモリは全体的には強いが言語的短期記憶に限局的に弱さがあった。知的ギフテッドのワーキングメモリ特性について相反する知見が存在するのは、課題特性を反映している可能性も考えられた。また2Eの子どもにおける学習面の困難さを理解し支援するためには、ワーキングメモリの包括的な評価が重要であることが示された。
	日高	2018	知的ギフテッド8名を対象に、WISC-IVとVine land-IIの関係から知的ギフテッドにおける日常生活上の問題について検討した。その結果、知的ギフテッドでは全般的な知的発達水準の高さ以外の要因が適応を難しくしている可能性、高い言語機能は知的ギフテッドの地域生活や社会性などの日常生活にはポジティブな効果をもたらしていないこと、処理速度がボトルネック的制約となりうる可能性が示された。
④ギフテッドのアセスメントや特徴に関する調査研究	日高ら a	2021	知的ギフテッドは刺激に対する高い感受性と強い反応であるOverexcitability (OE)を示す場合が多く、このOEを評価する心理尺度(OEQ-II日本語版)の日本語版を試作した。刺激に対する感受性についての定型反応を明らかにしていくことは、知的ギフテッドのOEに関する研究・支援の促進に結びつくと考えられた。
	日高ら b	2021	強いOverexcitability特性(OE)を示すギフテッドの児ではADHDと似た表現型を持つために、鑑別に課題がある。類似の行動で評価されるがあくまでも別概念であり、アセスメントでは不注意や多動衝動に加えて、精神運動性OE、創造性OE、知性OEの評価が鑑別に有益であることを示した。
⑤ギフテッドに関する	小泉	2019	学習障害に対する支援と実践研究を目的に立ちあげられた支援団体の歴史と支援システムについて紹介し、興味関心に基づいた学びの場と安心できるコミュニティの必要性、公教育から取り残されたギフテッドに個性的で多様な学びを援助することが求められていることを論じた。

レビュー論文	宮尾	2019	発達障害と不登校の関連について概説し、特に知的に高い発達障害のある子どもたちについても不登校の割合が多くなることを示し、自験例を複数紹介し知的ギフテッドの特徴に言及した。教育の場で2Eの児童生徒に適切に対応し、二次障害を引き起こさないような理解と支援の必要性を示した。
	日高	2020	知的ギフテッドについて特別支援教育や英才教育の観点から文献研究を行った。知的ギフテッドの持つ困り感（特別な教育的ニーズ）への対処については、教育的ニーズを補償する特別支援教育の形が望ましく、全ての子どもたちの教育的ニーズを満たす一つの方法としてインクルーシブ型の拡充という方向性を提示した。
	角谷	2020	本邦におけるギフテッド児のADHD、ASD、アスペルガー症候群との過剰診断の可能性を先行研究のレビューをもとに論じ、誤診から不適切かつ不必要で有害な治療に繋がり二次障害に発展すること指摘した。合わせて日本の教育・医療の場で認識されていないギフテッド児の可能性に言及し、特性理解のためのチェックリスト（信頼性・妥当性の検討は未）を紹介した。
	小林	2021	日本における gifted という語の理解と社会的需要について考察された。Gifted と talented の2つの語について、アメリカおよび日本での教育的使用とその背景・欧米で受容された歴史的背景・元となる言説と影響史の2つの観点から考察し、ギフテッドという用語だけを日本でも採用するには定義の整理が不十分であり、日本の文脈の中でより適切な用語が考案されることが望ましいと論じた。

5. 2018～2022年の特徴

2018～2022年に発行された知的ギフテッドに関する報告は13報であった。その概要を表4に示す。この時期はギフテッドの特徴や支援の実例をまとめたレビュー論文がもっとも多く、中に自験例の簡単な紹介を含みこむ報告が散見された。ギフテッドを経験する医療関係者や特別支援教育関連の専門家が徐々に増加し、また特別支援教育の開始に必ずしも医学的診断は必要とならず個別の教育的ニーズの発生時点から特別な対応を開始するという方針が浸透してきたことも相まって、自らの経験をもとにしてギフテッド支援の拡充の必要性を提言する流れが大きくなったものと考えられた。

また当事者を対象とした事例報告も複数あり、中でも本郷ら（2022）は一例のみではあるものの約6年に及ぶ追跡を行い長期的な予後についても報告している。また前期（2013-2017）の事例報告で用いられているアセスメントツールは主に高い知的発達水準を確認するためのWISC-IVであったのに対し、この期間ではVineland-II適応行動尺度を用いた生活適応度や、情緒面や社会性発達といった側面、ワーキングメモリーといったWISC-IVのみでは評価しきれない認知特性などアセスメントバッテリーに組み込まれる側面の幅が大きく広がり、また定量的なアセスメントがなされるようになってきている。事例の特徴や支援の方向性を整理すると、糸井ら（2021）と河村ら（2022）では発達障害を併存する2E児であり特別支援教育の文脈での支援、さらに糸井ら（2021）では学習内容の早修と拡充の試みもあり才能教育の文脈も含みこみ、本郷ら（2022）では発達障害特性は併存しないが集団不適応が生じていた生徒指導・教育相談での対応となりやすいタイプの児童への支援、と様々なタイプが報告され支援方針についてもエビデンスが提示されるようになった。

さらに本邦においてもはじめて知的ギフテッドに特化したアセスメント指標作成が試みられたり（日高らb, 2021；角谷, 2020）、初めて「知的ギフテッド群」を構成した定量的な調査研究も報告された（日高, 2018）。このように知的ギフテッドに対する知見が若干ではあるものの蓄積され始めた状況にあるといえる。

V. まとめと今後の展望

本稿では過去20年の本邦におけるギフテッドに関する研究状況を概観し、知的ギフテッドへの対応について今後の課題を検討することが目的であった。

この20年でギフテッドに関する報告は増加傾向にあるものの、全体数は決して多いとは言えず、特に本邦の知的ギフテッド群としての特徴を定量的に示そうとした報告は極めて少ない。特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議においても自治体・教育委員会、民間企業、NPO、など様々な団体による大規模な実践例が紹介されているものの(2022)、それぞれの支援の方向性が異なっていたり、定性的な効果検証にとどまっている印象である。臨時的に知的ギフテッドに対する支援の必要性はいうまでもなく、日本全国どの地域に生活していても支援を受けられる制度設計が急がれるということに異存はない。ただ根拠に基づきより効率的で効果的な介入方針へと整理していくためには、まだまだ事例ベースのエビデンスの蓄積が必須であると考えられる。ギフテッドは対象概念の定義があいまいであり支援団体により、研究者により、指し示されるものが異なっている可能性もある。しかし筆者は知的ギフテッドの定義を明確にして支援の枠組みを急ぎ構築するというよりも、複数の側面からの多面的なアセスメントに基づき対象者の特異な能力と困り感、ニーズを把握し、アセスメントに基づいた介入を行い、定量的に効果検証を行っていくことの積み重ねが、現状では曖昧模糊として支援対象となりにくい知的ギフテッドを誰一人取り残さないことに繋がる近道なのではないかと考える。

またギフテッド支援の方向性は、今回検討対象となった報告では特別支援教育やインクルーシブの文脈によるものが多くみられた。知的ギフテッドの抱える困り感を個別の教育的ニーズと捉え、既存の特別支援教育の枠組みに当てはめたり、それを若干拡張することが現状での現実的な対応策であるからであろう。ただ「令和の日本型学校教育教育(2021)」で強調されている、「個に応じた指導」を学習者の視点から整理した概念である個別最適な学びをすべての児童生徒で実現しようとするのが、知的ギフテッドの情緒面・行動面・生活適応上の困難さへの対応と、好奇心を尊重し特異な能力を伸ばしていくことがないがしろにされやすいという問題の双方を包括した解決策なのではなかろうか。この文脈においても、個別の事例ベースの知見を数多く積み重ねていくことが必須であると考えられた。

文献 (References)

- 林暁. ギフテッドの概念と日本における教育の可能性. 滋賀大学教育学部紀要, 76, 2017, 199-204.
- 日高茂暢, 室橋春光, 小泉雅彦, 足立明夏, 品川裕香. 日本の特別支援教育における知的ギフテッド支援を考える ～高い知能と併存する読み書きなど学習困難の問題をいかに支えるか～. 日本LD学会第23回大会発表論文集, 2014, 283-284.
- 日高茂暢. 知的ギフテッドにおける知的特性と生活適応行動に関する検討—知的検査WISC-IVとVineland-II適応行動尺度の分析—. 作新学院大学大学院心理学研究科臨床心理センター研究紀要, 11, 2018, 18-25.
- 日高茂暢. 知的ギフテッドの子どもの持つ特別な教育的ニーズの理解. J. Fac. Edu. Saga Univ, 2020, 4, 1:147-161.
- 日高茂暢, 富永大悟, 片桐正敏, 小泉雅彦, 室橋春光. 知的ギフテッドのOverexcitability特性を評価する心理尺度の開発. J. Fac. Edu. Saga Univ, 5(1), 2021, 95-112.
- 日高茂暢, 富永大悟, 片桐正敏, 小泉雅彦, 室橋春光. ギフテッドのOverexcitability特性と関連するADHD傾向, 空想傾向, およびマインドワンダリング頻度の検討. J. Fac. Edu. Saga Univ, 5(1), 2021, 113-131.
- 本郷一夫, 松本恵美, 九里真緒. 知的ギフテッド児の発達特徴と学校適応に関する研究. 東北教育心理学研究, 2022, 39-5

2.

- 糸井梨緒, 是永かな子. 特別支援教育の観点からのギフテッド教育の可能性—ユニバーサルデザインを用いた教育実践の検討—. 高知大学学校教育研究, 3, 2021, 33-40.
- 河村暁, 湯澤正通. 不登校児のワーキングメモリに関する一事例報告—知的ギフテッドと明らかになった子どもにおけるHUCRoWを用いた評価—. 広島文化学園大学学芸学部紀要, 12, 2022, 25-30.
- 小林茂. 日本における gifted という語の受容の課題. 札幌学院大学心理学紀要, 3 (2), 2021, 1-11.
- 小泉雅彦. 読み書き困難を持つ知的ギフテッドの支援. 子ども発達臨床研究, 6, 2014, 131-136.
- 小泉雅彦. 認知機能にアンバランスを抱えるこどもの「生きづらさ」と教育: WISC-IVで高い一般知的能力指標を示す知的ギフティッド群. 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 124, 2016, 145-151.
- 小泉雅彦. 学習に困り感を抱える子どもを支える～土曜教室の成果からギフテッド支援を考える～. 札幌学院大学心理学紀要, 2 (1), 2019, 29-36.
- 是永かな子. 通常学校におけるインクルーシブ教育のための教育方法—ノルウェーのLPモデルとデンマークのギフテッドプログラムを中心に. 高知大学教育学部研究報告 72, 2012, 169-179.
- 是永かな子, イェールドニルス. デンマークの教員におけるインクルーシブ教育への態度: Moberg Attitude Scale による結果と考察. 高知大学学校教育研究 3, 2021, 69-76.
- 松村暢隆. 発達多様性に応じるアメリカの2E教育: ギフテッド(才能児)の発達障害と超活動性. 関西大学文学論集, 68 (3), 2018, 1-30.
- 松本茉莉衣, 是永かな子. ギフテッドに対する補完的指導としての特別ニーズ教育. 高知大学学術研究報告, 62, 2013, 161-170.
- 松本茉莉衣 a, 是永かな子. ギフテッドの情緒社会面・行動面・感覚面における特別なニーズと対応. 高知大学教育学部研究報告, 75, 2015, 169-178.
- 松本茉莉衣 b, 是永かな子. 日本におけるギフテッド教育の歴史的展開—先行研究検討から—. 高知大学学術研究報告, 64, 2015, 51-59.
- 松本茉莉衣 c, 是永かな子. 日本のギフテッド当事者に対する特別な教育的ニーズに関する聞き取り調査 第三報. 高知大学教育実践研究, 31, 2017, 135-143.
- 宮尾益知. 発達障害と不登校—社会からの支援がない子どもたち: 2Eの観点から—. The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine, 56 (6), 2019, 455-462.
- 文部科学省. 今後の特別支援教育の在り方について (最終報告) 参考3 定義と判断基準 (試案) 等. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/054/shiryo/attach/1361233.htm (2023. 6. 25 閲覧), 2003.
- 文部科学省. 特別支援教育の推進のための学校教育法等の一部改正について (通知). https://warp.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/11373293/www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/06072108.htm (2023. 6. 25 閲覧), 2006.
- 文部科学省. 飛び入学について. https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shikaku/07111318.htm (2023. 6. 25 閲覧), 2019.
- 文部科学省. 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す, 個別最適な学びと, 協働的な学びの実現～ (答申) (中教審第228号). https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00002.htm (2023. 6. 25 閲覧), 2021

- 文部科学省. 特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する 学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議 審議のまとめ～多様性を認め合う個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実の一環として～. https://www.mext.go.jp/content/20220928-mxt_kyoiku02_000016594_01.pdf (2023. 6. 25 閲覧), 2022.
- 文部科学省. 特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議 (参考) 有識者会議において発表のあった実践事例・諸外国の状況に関する調査. https://www.mext.go.jp/content/20220928-mxt_kyoiku02_000016594_02.pdf (2023. 6. 25 閲覧), 2022.
- 中村順子, 水内豊和. 日本における GT 教育の可能性. 富山大学人間発達科学部紀要 5 (1), 2010, 161-168.
- 関内偉一郎^a. ギフテッド教育における RTI モデル活用に関する一考察: アメリカ合衆国の教育システム統合の動きに着目して. 筑波大学教育学系論集, 40 (2), 2016, 31-44.
- 関内偉一郎^b. ギフテッド対応型 RTI モデルにおける才能教育の多層的展開—「早修」と「拡充」の新たな実践的枠組みに着目して—. アメリカ教育学会紀要, 27, 2016, 44-57.
- 杉山登志郎, 小倉正義, 岡南. 『ギフテッド-天才の育て方-』. 学研プラス, 2009.
- 角谷詩織. 学校・家庭でのギフティッド児の誤診予防と適切な理解・支援のために: 日本語版ギフティッド-アスペルガー症候群, ギフティッド-ADD/ADHD チェックリスト—. 上越教育大学研究紀要, 39 (2), 2020, 301-309.